

インド、ラダーク地方ドムカルにおける家畜飼養の特徴、社会背景、およびその変容

稲村哲也¹⁾、カナル、キソル・チャンドラ²⁾、山本紀夫³⁾、
カルマチャリヤ、イシュワリ⁴⁾

1) 放送大学

2) ネパール総合地域研究所

3) 国立民族学博物館（名誉教授）

4) 宗教画家・図像研究者

ラダーク地方のドムカルは、ヒマラヤ地域の谷としては、最も高所（約4,150 m）まで農耕が行われている地域のひとつであり、非常に寒冷で乾燥した地域である。そこでは、農耕とともに、ヤク、ディモ（雌ヤク）、ゾモ（ウシとヤクの交雑種）、ゾー（ゾモの雄）、バラン（在来ウシ）などの移牧が行われ、数名の男性の牧者グループが、夏の間プーと呼ばれる高所草原（約4,550 m）で他の住民の家畜も預かって管理し、搾乳と乳加工を行う。ドムカルでは、このような移牧のほかにも、いくつかの伝統的な家畜飼養の形態がある。ドムカルにおける農牧複合は、この地方の厳しい自然環境に適応した、独自の特徴を持っている。それは互酬的相互扶助などの社会システムによって支えられてきた。本稿では、ドムカルの最高所の集落クラムリックとプーのひとつであるテベスムドに焦点を当て、ドムカルの家畜飼養の特徴を論じ、その社会的背景を概観する。また、相互に結びついた生業と社会、およびその変容について論じる。

1. はじめに

筆者らは、総合地球環境学研究所のプロジェクト「人の生老病死と高所環境—『高地文明』における医学生理・生態・文化的適応」（代表奥宮清人、通称「高所プロ」）の一環として、2012年4月下旬から5月上旬まで（4名）、同年調査8月下旬から9月上旬まで（稲村とカナルの2名）、ラダークのドムカルを中心に現地調査を行った。ドムカル谷は高所プロの医学班の調査拠点のひとつであり、また、月原敏博を中心とする生態・文化班が2007年から継続的な調査を行っている（月原2009）。筆者らの調査の目的は、まずはプロジェクト研究の総括に向けて調査地に関する認識を共有すること、牧畜を中心に他のヒマラヤ・チベット諸地域との比較検討を行うこと、また、やや手薄だった社会背景や信仰についての知見を得ることであった（信仰については別稿で報告したい）。

ラダーク地方、及びドムカル谷の位置と環境については、すでに多くの論稿で論じられている（池

田2010、平田2010, 2011、月原2009、野瀬・竹田2011、山口2010、山口・他2013など）ので、詳細は省くが、ラダークは、ヒマラヤ地域の中でも最も緯度が高く、また乾燥した地域であり、人の生活圏としては最も厳しい自然環境をもつ地域のひとつである。ラダークには、チャンタンのような標高4900 mにも及ぶ高所でヤクやヒツジ・ヤギの遊牧を営む人々もいるが、インダス川とその支流の谷などでは、農耕を主たる生業としながら家畜も飼う、いわゆる農牧民が多い。ドムカル谷もそのような谷のひとつである。以前は、交易も重要な生業であったが、国境紛争、インド軍基地の大規模な展開と道路建設、それに伴う急激な近代化、政府による食料援助などの影響で、1960年代から交易は衰退した。

ドムカル村は、ドムカル・ド（下村）、ドムカル・バルマ（中村）、ドムカル・ゴンマ（上村）の3集落に分かれており、その中心の標高はそれぞれ、およそ2,900 m、3,400 m、3,800 mである（図1）。

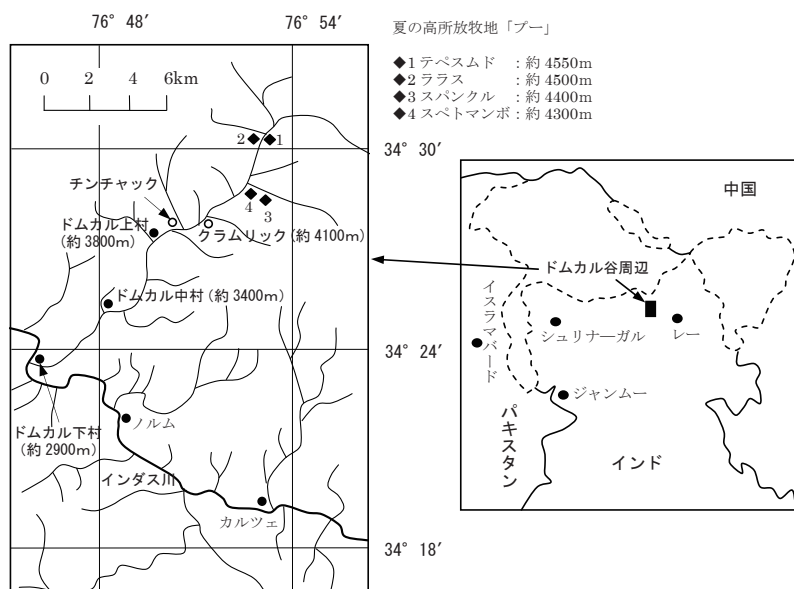


図1 ドムカル谷改訂版

ドムカル谷の人の生業は、全体としては農耕に重きを置いた農牧複合ということが出来る（以前は交易も重要であった）。伝統的にはオオムギやソバを栽培し、ヤク、ディモ（雌ヤク）、バラン（在来ウシ）、ヤクと在来ウシの交雑種であるゾー（雄）やゾモ（雌）、及び、ヒツジ・ヤギを飼育している。また、現在は、エンドウ、アズノの実などの商品作物の栽培が著しい。

ドムカル谷の上村の中心集落から谷を遡っていくと、標高 4,000 m あたりからクラムリックという集落に達する（写真 1、写真 2）。そこは上村に属しており、農耕集落としては最上流に位置し、農耕の上限である約 4,150 m あたりまでオオムギやエンドウが栽培されている。クラムリックより上流は、なだらかな氷河谷（U 字谷）が源頭部まで伸び、そこには草地が広がり、家畜の放牧地となっている。標高 4,500 m あたりには、夏の間に家畜を放牧管理する拠点が数ヶ所あり「プー（Phu）」と呼ばれている。クラムリック（Kuramrik）とプーで展開される農牧複合は、厳しい寒さと乾燥に適応した独自の特徴をもっており、とくに興味深い。

ドムカルにおける移牧に関しては、池田菜穂（2010）、平田昌弘（2010, 2011）による詳細な報

告がある。しかし、プーでの牧者の活動に関する具体的な報告はなされていない。また、池田の 2009 年の調査で報告されている 2ヶ所のプーである「ララス（Ralas）」（標高約 4,500 m）と「スパンクル（Spankul）」（標高約 4,400 m）は、2012 年夏には使われておらず、「テベスド（Tepesumdo）」（標高約 4,500 m）のみが、わずか 3 名の牧者によって使われていた。ドムカルの家畜飼養は急激な衰退・変化の過程にある。そこで、本稿ではまず、テベスドとクラムリックに焦点を当て、ドムカルにおける家畜飼養の現状と特徴について述べる。ついで、ドムカル谷の社会背景について述べ、生業と社会背景との関連性、また、その変化について論じる。

2. ドムカル谷の移牧

2-1. 移牧の行程

移牧（Pastoral transhumance）とは、牧民と家畜の「規則的な上下の季節移動」のことである。ドムカルの場合、（後述する）ネパールのシェルパに見られるような、家族単位の移牧の活動はなく、数名の男子のグループが夏放牧地プーに家畜を追い、そこで家畜の放牧管理を行ってきた。プーは標高 4500 m 前

後に位置し、初夏、クラムリックの集落からプーまで、家畜群は一日で一気に移動する。

以前は、プーは4ヶ所ないし5ヶ所あったが、ドムカルでは家畜が年々減少し、2012年夏の調査時においては、利用されているプーは「テベスムド（3つの谷が合流する所）」のみであった（図1）。そこで家畜放牧に従事している「牧者」はクラムリックの男性3名だけであった。

移牧サイクルは、初夏の7月にプーに家畜を移動させ、約2ヶ月間そこで放牧し、9月、クラムリックで収穫が終わると、集落の方に下ろすというものである。移動の日は、ラマ僧に相談するが、プーに上がるのはチベット暦ガベ・ツォ（5月18日）と決められている。

牧者は、夏の放牧地に自分の家畜のほかにはパスブン（親族：後述）などの家畜を預かって放牧する。まず、牧者が自分の家畜を追ってプーに到着する。その後、家畜を委託したい者は、個々に自分の家畜をプーに連れていき、牧者に預けたあと、村に戻る。約2ヶ月間、牧者たちはプーの共同の小屋に住み、家畜の放牧管理と搾乳・乳加工などに従事する。

秋の9月に家畜を下ろす時、牧者は家畜をクラムリックの上の草原まで下ろすと、家畜を預けた人はそこまで受け取りに行き、そこから自分の家の方に連れていく。

9月、10月は、畑の刈り跡で放牧し、搾乳する。冬の間は、集落内の囲いと畜舎で飼い、ムギ藁、乾燥させたエンドウの蔓などを与える。その他、池田菜穂によれば、アルファルファ、雑草、残飯にオオムギ炒粉をまぜたものなどを与える（池田2010）このような冬の家畜飼養管理のため、クラムリック住民の各家には家畜囲いがあり、また子家畜を保護するための小屋も付随している（図2）。この期間に畑や囲いに落とされる家畜の糞は、肥料として重要である。

以上が、ドムカルにおける移牧の概要だが、冬の寒さが非常に厳しく、乾燥し、生態資源が限られた（山田2013）、この地域における独特の工夫が見られるのである。

以前は、家畜を、4月頃にクラムリックからスパンクル（標高4,400m：クラムリックとテベスムドの中間に位置する）などに上げて7月頃まで放牧し、そのあとに高所の放牧地テベスムドなどに行った。しかし、2010年頃から直接テベスム

ドまで上がるようになったという。

プーで夏を過ごした家畜のうち、ヤク（雄）と搾乳しないディモ（雌ヤク）はそのままプーに残していく。それらの家畜は、雪が降り始めると、スパンクル（標高約4400m）まで降りてくる。

2-2. 夏の放牧地プー

筆者らは、2012年夏、テベスムドを訪問した。石の家畜囲いがいくつかあり、その脇に石積みの小屋がある（図3、写真3）。小屋は、そこで牧者たちが生活し、そこで乳加工作業と乳製品を保管するためのものである（写真4）。テベスムドの牧者はTN、SA、TTの3名の男性で、いずれもクラムリックの住民である。TNとSAは兄弟である。食糧は、この地域でよく食されているツアンパ（ラダーク語でンガベイ、煎ったオオムギの粉）やトゥクパ（うどん）（木村2011）の材料のオオムギ粉、コムギ粉などを、テベスムドにあがる際に2カ月分持ってくるが、一回はクラムリックの家に帰るといふ。

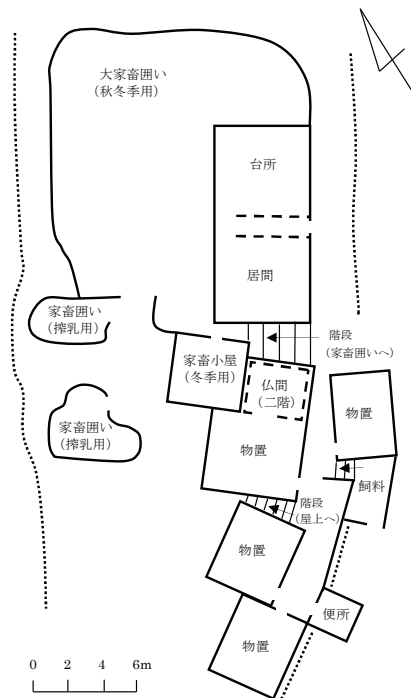


図2 クラムリックの住居

現在、3名の牧者が管理している家畜の個体数と内訳は表1のとおりである。TN、SA、TTの3名が自ら所有する家畜は、5頭、9頭、10頭で、そのうち搾乳家畜は、それぞれ4頭である。したがって、ヤク（雄家畜、つまり搾乳しない家畜）が、それぞれ1頭、5頭、6頭の計12頭である。委託された家畜は、それぞれ12頭、12頭、10頭で、そのすべてが搾乳家畜である。委託家畜は、同じパスプン（親族）をはじめ、クラムリック、上村、中村、下村の住民から預かっている。

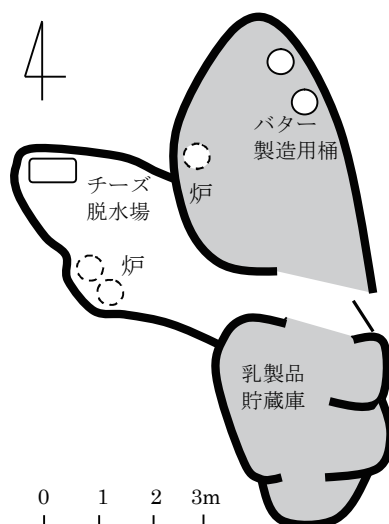
テベスムド全体で、自己所有と委託の搾乳家畜の合計は46頭、牧者3名の自己所有のヤク（雄）を含めると、58頭となる。搾乳家畜の内訳は、ディモ11頭、ゾモ29頭、それに、在来ウシ（雌）6頭である。このように、少数の在来ウシも移牧の対象となっている。在来ウシを夏の放牧地でヤクと交雑させ、ゾー・ゾモを出産させることも、その重要な目的の一つである。ゾモの場合は、ヤクと交尾させて出産させることにより、搾乳をする¹⁾。以上の成熟した家畜のほかに約30頭の子家畜も飼われている。子家畜には、ヤクの子、ゾモとヤクの交配による第二代交雑種（F2）、ゾモと種ウシの交配による第二代交雑種（F2）、ウシとヤクの交雑種（F1）などが含まれている。

テベスムドの牧者たちによれば、以前プーは4ヶ所あったという。プーで家畜を飼う牧者グループも4つあって、4ヶ所の放牧地をローテーションして使っていた。テベスムドの他に、ララス、スパンクル、スペトゥマンボ（Spetumanbo）があった²⁾。しかし、家畜が次第に少なくなったため、まずスパンクルが使われなくなり、2012年には

テベスムドの1ヶ所だけになった。2011年まで、ドムカル・ド（下村）の2人と、ドムカル・ゴンマ（上村）とトンロス（上村の少し下流の小集落、上村に属す）からそれぞれ1人が来ていたが、2012年からは来なくなった。TTの場合、その兄が来ていたが2012年から来なくなったため、TTが兄の代わりに来るようになったという。

2-3. 搾乳と乳加工

8月29日早朝に搾乳を観察した。5時30分頃からゾモの搾乳が始まり、その1時間後にディモ



* アミカケ部分は屋根付き

図3 プーの小屋

表1 フー（夏放牧地）のテベスムドにおける3名の牧者の家畜数

		Yak 雄ヤク	Drimo 雌ヤク	Dzomo 雌交雑種	Balang 雌ウシ	家畜合計 58	搾乳家畜合計 46
TN	自己所有	1	2	2	0	5	4
	委託	0	1	8	3	12	12
	計	1	3	10	3	17	16
SA	自己所有	5	3	1	0	9	4
	委託	0	1	8	3	12	12
	計	5	4	9	3	21	16
TT	自己所有	6	1	3	0	10	4
	委託	0	3	7	0	10	10
	計	6	4	10	0	20	14

の搾乳が始まった。囲いの中で繋がれていた子ヤクを放すと、母ディモに突進して乳を飲む。1～2分授乳させてから³⁾、子ヤクを囲いに繋ぎ、搾乳を始める（写真5）。搾乳時間は1頭当たり5分くらいである。7時15分、2時間弱で搾乳が終了した。その30分後の7時45分頃、まず、子家畜を放つ。子家畜は、小屋の近くの草地で放牧される。その後しばらくしてから、母家畜を放牧地に追う。午後3時頃、放牧地から子家畜を追ってきて、囲いに繋ぐ。子家畜は夕刻に行われる搾乳まで繋いでおく。それによって子家畜が乳を飲んでしまうのを防ぎ、搾乳を可能にする。夕刻になると、母家畜が放牧地から囲いに追われ、搾乳が行われる。

搾乳量は、TNが約35リットル、SNが27リットル、TTが27リットルで、合計約90リットルであった。TNによれば、夏の放牧地で、1人当たりおよそ100 kgのバターを生産する。家畜1頭あたり2 kgのバターを提供するため、バターの生産量の3～4割を委託された家畜の所有者に提供する。また、約50 kgのチュルピ（チーズ）が生産できる。バター1 kgの価格は、ドムカルで約400ルピー、レーで約500ルピーである。チュルピ1 kgの価格は、約200ルピーである。

朝8時頃からヨーグルトとバターの加工が始まり、そのプロセスを観察することができた（図4）。まず、乳（Oma）を大鍋で30分ほど温める。加工済みのヨーグルトを少し入れて、保温のため布で包み、小屋の中で一晩寝かせるとヨーグルトができる。翌朝、攪拌桶にヨーグルトを入れて攪拌し、固形化させてバター（Mar）を作る（写真6）。バターは、ゾモの子の毛皮で作った袋や胃袋に入れてほぼ密封し、そのまま保管する。

バターを取ったあとの乳をダルバ（Darba）という。これを約1時間温めると固形化する。これがチュルピの素であり、それを荷袋に入れて濾し、固形化させてそれに石を載せて圧縮し、一日置いて水分を抜くと「生チュルピ」ができる。チュルピを濾したあとのホエーをダク（Darku）といい、これは、ツァンパ、塩、チャンの滓を混ぜて家畜に飲ませる。

荷袋に入れて濾した生チュルピを囲いにもっていき、一人が両手で大きな団子状にして、広げた白い布の上に放る。直径20 cmくらいの「お供え餅」状のものが20ほどできる。それをもう一人が、右手でちぎって握り、指の間から絞り出す。一度に3本の細いチュルピを成形することができる。30分余りで、約3 m四方の布一杯にチュルピが

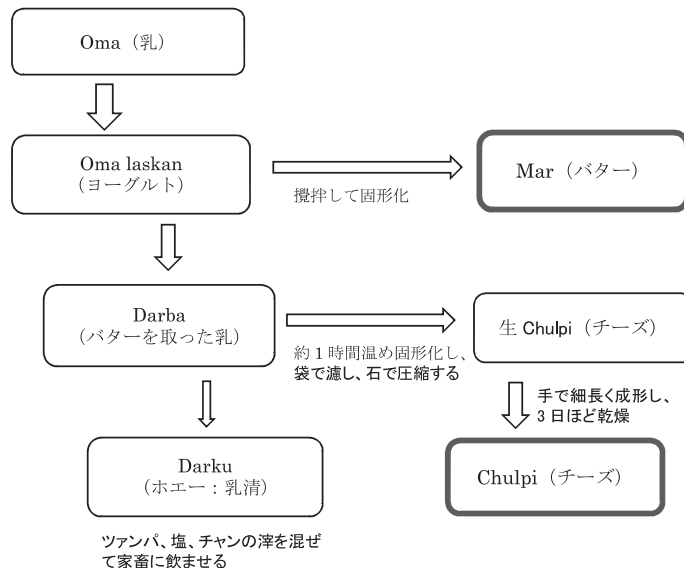


図4 夏放牧地における乳加工



写真1 ドムカル・ゴンマ（上村）から上流を望む



写真2 ドムカル谷の上流。対岸がグラムリク



写真3 ドムカル谷上流のプー（夏放牧地）「テバスマド」



写真4 石積みの家畜番小屋。周囲の景観に埋もれている。



写真5 ディモの搾乳



写真6 ヨーグルトを攪拌してバターを作る



写真7 左の人物は団子状の生チュルピを放り、右の人物が小さく成形して広げる。



写真8 ドムカル上村でのヤギの日帰り放牧。

広げられる（写真7）。そのまま3日間くらい天日で乾燥させると、白からベージュ色に変わり、固いチュルピが完成する。

乳加工の作業が終わると、草地で家畜の糞集めが行われる。糞をカゴに入れて集め、大きな石の上などに置いて乾燥させ、燃料として保存するのである。プーでは樹木など燃料とするものがないので、調理や乳加工の過熱のためには糞が不可欠である。

3. ドムカルにおける多様な家畜飼養

3-1. ウシ属家畜の日帰り放牧

クラムリックからテベスムドに向かう途中で、ヤク、ディモ、ゾモ、ウシなどをしばしば目にする。つまり、すべてのウシ属家畜が、上で述べたような移牧の対象となっているわけではない。谷沿いには草地が続いており、とくに谷の支流（懸谷）の沖積地には湿原が広がり、放牧に適した場所が少なくない。それらのクラムリックに近い草地で放牧されるディモやゾモは、夕刻前には村のほうに追われる。クラムリックの各世帯では、搾乳してミルクを利用するために、1頭ないし数頭の泌乳中のウシ属家畜を（谷の上流や斜面の）隣接する草地で日帰り放牧しているからである。標高約4,000 mから4,150 mあたりの高所に位置するクラムリックでは、夏でも、集落周辺でディモやゾモを放牧することが可能である。秋になると、草原の草も枯れてくるため、9月中頃から12月頃までオオムギなどの収穫後の畑の刈り跡で放牧する。11月頃から雪が降ると、村の家の家畜囲いか小屋で飼う（図3）。秋から冬にかけての家畜の管理は、移牧が行われる家畜とほぼ同様である。すでに述べたように、この時期に集められる家畜の糞は農耕の肥料としてたいへん有用である。ドムカル谷の最高所に位置するクラムリックでは、厳しい冬の間の家畜の管理に独特の工夫がみられるのである。

クラムリックの上流の草地では、ゾーやヤクなど雄家畜や、（出産しなかった）泌乳していない雌家畜も、放牧されている。それらは、搾乳の必要がないため、夏の間は、草地に放置されたままである。牧者がプーで放牧管理されていた家畜を下におろすときに、放置されていた群を一緒にクラムリックに連れて行くことが多いという。

3-2. ヤギとヒツジの日帰り放牧

ドムカルでは、ヒツジやヤギも多く飼われており、そのほとんどは、春先の3月から雪が降り始める10月まで、牧者が付添う日帰り放牧が行われる（写真8）。

テベスムドでの現地調査の帰路、クラムリックの集落に着く手前で、ヒツジ・ヤギ群を村の方に追う老人に出あった。彼は、橋を渡って村に入った所で、ヤギ・ヒツジ群を二つの群に分けて、その一群を追って村の中に向かった。他の一群は別の女性が追っていった。この二人は、約20世帯のヤギ・ヒツジを預かって放牧しているとのことであった。それぞれが、自分の家の家畜囲いにヤギ・ヒツジを誘導する。夜の間、囲いには糞がたまる。それは肥料として有用である。

ヤギ・ヒツジの牧者は、放牧を共同している約20世帯から二人ずつ選ばれ、1ヶ月交替でローテーションするそうである。このように、放牧の共同によって、労働力を節約することができ、畑仕事などに従事することができる。11月から3月までは、雪が降るので、各世帯の囲いで飼う。

3-3. バレス：ローテーションによる家畜の夏の放牧

先に述べたように、ウシ属の雄家畜と、泌乳していない雌家畜は、夏の間、クラムリック上方の草地に放置される。以前は、それらの家畜を共同で放牧管理する、バレス（Bares）と呼ばれるシステムがあった。下村、中村、上村でそれぞれグループを作り、各世帯から順番に当番を出して、全世帯の家畜を群として管理し、放牧地を巡回していたのである。クラムリックも、別個にひとつのグループを作っていた。

当番の牧者は、他の世帯からオオムギを受けとった。放牧の移動生活にはヤク毛のテントが使われ、当番には、テントを作るためのヤクの毛も与えられた。

当番の順番は、昔はロンボ（地方小領主：後述）が決めていたが、ロンボ制がなくなった1971年以後はゴワ（伝統的な村長）が決めるようになった。その後、若者たちが、村外の学校に入ったり、軍や関連の職業に就く機会が増えて村外に出ることが多くなり、人手の確保が難しくなった。それに伴って家畜の個体数も減少したため、現在はこ

のバレスの慣習はなくなった。

4. ドムカルの家畜飼養の特徴—ネパール・ヒマラヤのシェルパとの比較による

4-1. シェルパの移牧

移牧については、ネパールのチベット系山岳民族シェルパの研究がよく知られている。筆者も以前、サガルマタ（エベレスト）南麓のソルクンプ地方のソル地区（南のやや標高の低い地域）で、シェルパ社会の現地調査を行った（山本・稲村編2000）。

シェルパの多くは農民で、伝統的にはオオムギとソバを中心に栽培していた（現在はソバは少なく、ジャガイモが多く栽培されている）。シェルパの一部の世帯はディモ（雌ヤクはシェルパ語ではナクと呼ばれる）またはゾモの群を所有している（ディモまたはゾモを群として所有するのは数十戸の村の中の数世帯である）。そうした世帯では、世帯成員の一部が、農村（母村）の家を離れ、自らの家畜群を追って移牧を行う。ソルクンプ地方のクンプ地区と比べると比較的標高の低いソル地区の場合、耕地はおおむね標高2,500 mから3,000 mの間に位置している。冬の間はその周辺の森で放牧し、春には徐々に谷沿いを上っていき、森の中の何ヶ所かの放牧地で過ごし、初夏に標高約4,000 m以上の高さの夏の放牧地に到着する。夏放牧地には、それぞれの家族単位で所有する固定の小屋が建てられている（写真9）。彼らは、夫婦で移動し、夏の放牧地で一緒に過ごすことがおおい。子どもが移動に加わることも多く、家族単位での移牧活動が一般的である（写真10）。また、世帯の成員は母村と放牧地の間をかなり頻繁に往復する。

10戸近い小屋が集まっている夏放牧地で数ヶ月過ごしたあと、秋、気温が下がり、降雪が始まるころから、徐々に農耕集落のほうに下っていく。ディモは高所の寒冷地に適応しているが、ゾモはディモほど寒さに強くないため、夏放牧地で過ごす期間は、ディモが2、3ヶ月であるのに対し、ゾモの場合は短く約1ヶ月である。また、冬はディモが標高約3,000 mの高さに留められるのに対し、ゾモは約2,500 mまで下ろされる。このように、ディモ群とゾモ群では、移動範囲と時期が少しずれている。したがって、ディモ群かゾモ群かどち

らかを一方を飼っていて、両方を一緒にの群として飼うことはない。

一般的に、ディモの群には、種雄のヤクと、チベット由来の高地種の種ウシを一緒に飼う。ディモの群の飼養の最大の目的は、ディモと種ウシを交雑させてゾモを生産することである。ゾモは乳生産量が多いため、高値で売ることができるからである。種ウシとの交雑がうまくいかないディモは、種ヤクと交雑させ、ディモ・ヤクを再生産する。

ゾモを飼養する目的は乳の生産であるが、同じF1の雄であるゾーの方は不妊で、ゾモの妊娠出産のためには中高度に適応したシャクツァという種ウシを使う。ゾモの子であるF2は乳量も少なく、家畜としての価値が低いため、シェルパの場合は死なせてしまうことが多い。そこで、ゾモを飼養する世帯は、ディモを飼養する世帯からディモを買い入れて、常に補充する必要がある。

4-2. ドムカルの家畜飼養の特徴

このシェルパの移牧の形態と比較すると、ドムカルにおける移牧の特徴が明らかになる。まず、移動のルートであるが、ソル地区のシェルパの場合は、森林限界を超えた夏の放牧地にいたるまで、春の数ヶ月は豊かな森のなかで数ヶ所に仮小屋を建てて徐々に移動する。ドムカルは、モンスーンの影響がないため雨量が非常に少なく、森がないため、集落からすぐに氷食谷の草原に至り、現在は一気にプーまで移動している。また、シェルパの場合は、集落の周辺にも森があるため、冬でも林間で放牧が続けられる。しかし、ドムカルでは、秋にはオオムギ畑などの刈り跡で放牧され、真冬には家の囲いで干草や藁を与えて飼育する。このように、ドムカルの場合は、農と牧とがより複合的に組み合わせられていることがわかる。その背景には、厳しい寒さと乾燥のため、生態資源がより限られていることがある。

ドムカルのゾモは、雌ウシと種ヤクの交雑種（F1）であるが、ソル地区のシェルパでは、逆の組み合わせ、ディモ（シェルパ語ではナク）と種ウシの交雑がふつうである。ソル地区では、ディモの比較的大きな群（数10頭）を飼っているため、ゾモを生産するためには（チベット系高地種の）種ウシとの交雑が自然な方式となる。一方、ドム

カルでは、ディモと交雑させる種ウシを飼っていない。そのため、ウシを種ヤクと交雑させてゾモを生産している。ウシをブーに連れて行き、そこでヤクと交配させるのである。ウシが移牧の対象になっているのは、そうしたゾモ生産の目的もある。ソル地区では、雌ウシが移牧の対象になることはない。

先に述べたように、ディモ群を飼養する世帯と、ゾモ群を飼養する世帯とは異なり、ディモとゾモが同じ群として飼われることはない。両者は、寒さへの適応の度合いが異なるため、移牧のサイクルも異なるからである。また、ディモ群とゾモ群とでは飼養の目的が異なり、種雄も前者が高地種ウシ、後者が中高度のウシと異なっている。ソル地区とは異なり、ドムカルでは、牧者たちは夏の放牧地ブーで、ディモ、ゾモ、ウシと一緒に管理している。その要因のひとつとしては、ネパール東部のソル地区の方が雨量が多く、植生が豊富であることが考えられる。ゾモは冬には標高 2,500 m ほどの集落周辺の森などで放牧されるが、その高さでは温暖すぎてヤクは病気になるという。一方のドムカルでは、厳しい乾燥のため植生が乏しく、特に森が存在しないため、群を分けることのメリットが少なくと考えられる。一世帯が所有する家畜の数も限られていることも、もうひとつの要因であろう。

移牧の担い手については、シェルパでは家族単位での移動・管理が基本であるのに対し、ドムカルの場合は、数世帯の家畜をまとめて、数名の牧者グループによる共同管理が行われている。この背景にも、厳しい自然環境と生態資源の限定性があり、農と牧の複合構造がより強いことが反映されている。伝統的には、すべての家族にとって、乳利用、犁耕と肥料のため、家畜は不可欠であった。一方で、若干の余剰の家畜が財産となったが、その管理のための人手を省く必要があった。かつては長距離の交易活動にも若者・中堅の労働力が必要だったからである。そこで、家族単位で移牧を行うよりも人手が省ける共同管理のしくみができたのではなかろうか。つまり、泌乳ウシ属家畜にはブーを利用した共同の移牧システム、泌乳しないウシ属家畜については共同管理のバレス制が発達したと考えられる。

バレスの移動にはヤク毛製のテントが使われて

いた。そのため、より頻繁な移動が可能であり、単位面積当たりの草量が少ない乾燥草地をより広範囲に利用することができる。バレスによる家畜飼養は、夏に高所放牧地を利用する「移牧」の一種と言えるが、夏の期間に水平に自由に移動する「遊牧的要素」が含まれており、年間（夏冬間）の上下移動と夏の水平移動が組み合わせられた複合的な移動である。それも、ドムカルにおける家畜飼養の特徴のひとつであったと言えよう。

なお、本稿はクラムリックとブーでの家畜飼養に焦点をあてたため、割愛したが、山口哲由らと平田昌弘の報告（山口他 2013、平田 2011）によれば、かつては、下村、中村の住民のほとんどが上村にも耕地をもっていた。下村、中村の世帯は、上村やクラムリックの耕地の周辺に出作り小屋をもっており、夏のあいだ、周辺の草地で家畜を日帰り放牧するか、ブーで家畜を管理する牧者に委託した。また、輪番制家畜管理「バラス」の牧者に委託した。このように、下村や中村の住民の一部は、農耕と牧畜の両要素による上下の移動をしており、これはネパールの「高地シェルパ」の生業形態と同様の「移牧移農」といえる（ソル地区のシェルパの生業形態は、牧畜要素のみによる移動で「移牧定農」）。しかし、近年はドムカル住民の「空洞化」によって、下村・中村の住民が所有する上村の耕地の耕作放棄地が増えている。また、家畜飼養の減少によって、このようなタイプの生業形態が衰退している。

ドムカルにおける近年の家畜飼養の変化として、全体の個体数が減少したこと、ウマ、ロバなどの交易のための荷役家畜が著しく減少したことがあげられる。他に、軍による肉の需要が増えた

表 2 家畜価格

家畜の種類	価格(ルピー)
ヤク	25,000
ディモ	16,000
ゾー(耕起用)	16,000
ゾー(肉用)	12,000
ゾモ	16,000
バラン	4,000
ヒツジ・ヤギ	4,000

ことによる、肉用家畜の割合が増加したことがあげられる。

2009年8月に池田菜穂がドムカルにおける牧畜経営の詳細な調査を行い、ウシ属家畜の一般的価格をあげている（池田 2010）。その4年後の2012年8月、筆者らも聞き取りにより家畜の平均的価格を調べた（表2）。それによると、ヤクでは、15,500 ルピー（池田のデータの平均値）から25,000 ルピーへと約6割上昇している。ディモでは10,500 ルピーから16,000 ルピーへと約5割、ゾモでは10,000 ルピーから16,000 ルピーへと6割、ゾー（犁用）では13,000 ルピーから16,000 ルピーへと2割余り上昇している。この犁用のゾーとは別に、肉用のゾーの価格として12,000 ルピーがあげられた。また、ヒツジ・ヤギの価格は約4,000 ルピーである。ムスリムのブローカーが、ヤク、ゾー、ヒツジ、ヤギなどの肉を買い付けにきて、軍に売るとのこと。

5. ドムカルの社会背景

5-1. 社会システムと住民の生活

ラダークには、日本の本家・分家制度に隠居を加えたような制度がある。この制度の多様性について山田孝子が詳しく論じている（山田 2009）。一般的には、両親が老いると、結婚した長男に家を譲り、その家をカンチェン（大きい家：本家）とする。次男以下や婿取りの娘にはカウン（小さい家：分家）を与え、隠居した親はカウン（小さい家：分家）に同居することが多い。カンチェンの屋上の隅には、イエの神であるラーを祀るラトーが設けられている（写真11）。

親族関係は、父から子へと系譜関係がたどられる父系出自により、父方の祖先を共有するパスブンと呼ばれる親族集団（父系出自集団）が形成されている。パスブンの多様な機能についても山田孝子が詳しく論じている（山田 2009）。ドムカルでは、各パスブンのラトーが谷の斜面などに設けられている。ロサル（新年）には、そこにパスブンのメンバーが集まって祝い、ウシやヒツジの角を新たに安置する。9月のシュプラー（初穂儀礼）などの機会にもパスブンが集合して、チャンを飲んで、歌や踊りを楽しむ。結婚式、出産、葬式などの通過儀礼にも、パスブンが集まり、贈与や相互扶助の機会となる。



写真9 シェルパの夏放牧地（標高4300 m）



写真10 シェルパの移牧、秋に下方に向かって家族で移動中。



写真11 屋上に祀られているラトー



写真12 労働交換システム（相互扶助）で行われている畑の耕作

隣人関係では、レジとよばれる、農業における労働交換のシステムが重要である（写真 12）。村内で順次に行われる種蒔や収穫の農作業に、近隣の住民が集まって手伝う。畑の主は、労賃は払わず、食事やチャンを振舞う。クラムリックでは今もこの制度が維持されているが、下村、中村などでは、今は、人手が足りないときには、賃金を支払って雇うこともあるという。

ドムカルの下村、中村、上村には、それぞれチベット仏教の寺がある。寺に安置されている仏像は、下村では、千手千顔観音とグル・リンポチュを中心に、緑ターラー、観音、弥勒菩薩、阿弥陀仏、釈迦仏、ミラレパ（ゲルク派開祖）などが確認できた。壁面には、金剛薩タなどの男女合体尊を含む多彩な尊格が描かれている。こうした寺院は、村人の信仰の中心であるとともに、祭のときには人びとが集まってチャンを飲み、踊りや歌を楽しむ親睦の場として機能してきた。以前は、次男を僧にするという慣習があり、ドムカル全体で 25 人ほどの僧がいたが、20 年ほど前から、若者が就学し村から出て行くことが多くなり、僧のなり手も減って、今では各寺にひとりの僧のみになったという。

1971 年より以前には、ドムカルには学校がなく、僧になるのがほとんど唯一の教育の機会でもあった。現在、ドムカルでは、下村に 10 年制の学校があり、中村と上村には 8 年生まで、クラムリックには 5 年生までの学校がある。ドムカルが属すブロック（Block）の行政中心であるカルツェには 14 年制の学校がある。奨学金や授業料免除の政府の補助制度があり、そうした支援によって、カルツェや、レーの町で教育を受ける若者が急増している。大学に相当する 15 年生からはレーやジャンムーに行き、教育を受けることが多い。村外への就学、就労については、山口哲由が詳しく報告している（山口 2010）。

5-2. リーダーシップとその変容

ラダーク王国は 10 世紀ごろから続いていたが、1834 年にドグラ地方のイスラムの藩王グラブ・シンに侵攻され、ドグラ藩王に朝貢するようになった。1846 年に藩王は大英帝国と条約を結び、植民地下にジャンムー・カシミール藩王国を成立させた。そして、1948 年のインド・パキスタン

分離独立により、バルティスタンがパキスタンに、ラダークとザンスカルがインドのジャンムー・カシミール州に帰属した。

上村のほぼ中央に、昔の村の小領主であったロンボの大きな家がある。最後のロンボの次男に当たる TW 氏から、ロンボの歴史を聞くことができた。ドムカルのロンボの家系は、ラダーク王が敗れた後のドグラ藩王の体制下で、村の長であり徴税人として任命されたのが始まりで、それから 7 代続いたという。当時は、地域の農地のほとんどはロンボの所有とされ、村人は小作人として働いていた。ロンボはオオムギを税として徴収しラマユルに運んで取めた。

1971 年の農地改革により、ロンボの土地のほとんどが地域住民に分配された。それ以前は、ロンボは村の長でもあり、重要な決め事はロンボが行った。村人の結婚式や葬式の日取りは必ずロンボに相談した。家畜の共同管理のバレスの担当の順番もロンボが決めていた。農地配分以後、村人のロンボに対する尊敬は薄れたが、今も 12 世帯はロンボのために働いているという。改革以後、ロンボ制が廃止され、ゴワ（村長）制度に変わったが、最初のゴワには元のロンボが選出された。経済的・時間的余裕があって行政に携わるのでできる人材が他にいなかったためであろう。

5-3. 交易とその衰退

以前、交易は重要な生業のひとつであった。中村の長老によれば、「若いころ、ラマユルのイギリス軍のキャンプあり、そこからイギリス兵とインド兵と警察の荷物を運ぶ仕事をした。イギリス兵からは賃金をもらわなかったが、インド兵と警察から賃金をもらった。カルギルとレーの間（250 km）を運搬すると、ウマ 1 頭 16 日間の行程で 70 ルピーをもらった」。「父の時代は、オオムギをレー、カルツェ、ラマユルなどで売った。およそ 1 ヶ月かけてチャンタンに行き、オオムギやアンズを売り、そこから塩、パシュミナ、ウールなどを仕入れて、スカルド（パキスタン）に持って行って売り、そこからドライ・フルーツなどを仕入れてきてチャンタンで売った。またスカルドからはからし油を手に入れて自家用にした」。クラムリックの住民によれば、「父は、サクティまでオオムギを持っていき、チャンタン牧民がもってくる塩

と羊毛を手に入れた。トゥルトウツクにバター、チーズなどを持って行き、薬草などを手に入れた。そして、薬草をレーに持って行き、茶を買って、牧民などに売った」。

現在は、道路と市場経済・商業の発達、食糧援助などの影響で、かつて行われていた広域の交易活動は消滅した。ドムカルでは、交易に使われるロバやウマが多数飼育されていたが、現在はそれもほとんど見られなくなった。

6. ドムカル社会の変容と牧畜の衰退

6-1. 生活の変化―長老の嘆きから

ドムカル中村の長老は、昔と今の変化について次のように話してくれた。

ドムカルに道路が通じたことによってレーが近くなった。昔はレーまで行くのに2日以上かかった。政府の仕事でレーまで行くには、海外へ行くような準備をしていかなければならなかった。今は、朝行って夕方に帰れるようになり、便利になった。

今は簡単に物が手に入るようになった。昔は、生活に必要なものが何か足りない時、隣の家や他の家から借りることがあった。しかし、今はそのようなことがなくなった。道路ができた後、物をレーで買うことができ、ドムカルの村の中でも生活用品を買えるようになって、とても便利になった。

農業のためには、化学肥料と種を買えるようになったが、それは便利と言えるかどうか分からない。以前は、化学肥料は使っていなかったし、種も地元のものを使っていた。ウシ、ヒツジ、ヤギ、ウマなどを飼って、その糞を肥料として使っていたので、農産物の生産が安定していた。収穫した作物がとてもおいしかった。重さも今よりずっと重かった。化学肥料を使っていなかった時には、農産物の保存にも問題がなかった。例えば、ジャガイモを長く保存できた。しかし、化学肥料を使ってから、最初の何年間は生産が上がったが、その後、だんだん生産力が落ちた。今は生産力が落ちて、農産物が軽い。また、化学肥料が安く買えることで、この地域でウシ、ヤク、ウマ、ヒツジを育てる人の数が減った。

今はこの地域の農業は化学肥料に依存している。農産物を長く保存できないので、安い値段でマーケットへ売らなければならない。

前より生活が豊かに見えても、心が貧しくなっている。道路がない時、子どもたちはレーのような都市に行くより村に残って、農業や家畜の仕事に就いた。自分たちの仕事を子どもたちが継いでくれて、とても安心だった。道路ができたことによって、子どもたちがレーに行って仕事を探すことになった。今は家を守るのは年寄りだけだ。私はこのことがとても寂しい。私たちがいなくなったら、この大切にしてきた畑や家を守る人がいなくなるのではないと思う。私は、妻と3人の息子がいるが、家にいるのは夫婦だけだ。カンチェン（本家）を譲った私の長男はレーで働き、家にはその妻だけ住んでいる。彼らの子どもが2人いるが、その子どもたちもレーの学校で勉強している。レーで勉強するまではいいかもしれないが、レーから他の都市に行って勉強したら、もうドムカルへは帰ってこないだろうと心配している。

他の多くの老人たちも一様に、「食べ物には豊富になったけれど、子どもたちが出ていってしまい、寂しい」「昔はお寺にたくさんの人が集まって、楽しかった。今は話す機会がなくなってしまった。」と嘆く。

6-2. 家畜飼養の衰退―世帯の事例から

ドムカルにおける家族と生業活動（とくに家畜飼養）の現状を知るため、いくつかの世帯で聞き取りを行った。以下で3つの事例を見てみよう。

①事例1 男性（65歳）上村

ゴンマ（上村）の住民で、約30年の間、移牧を行っていたが、2011年からプーに行くことをやめた。以前は、ゾモ30頭、ディモ5頭、バラン（在来ウシ）8頭ほどを所有し、夏にはプーで放牧管理していた。また、下村の6世帯ほどから、16頭（ゾモ9頭、ディモ5頭、ヤク2頭）ほどの家畜を預かってプーで管理した。家畜を預かる場合、所有者にバター2kgを提供し、残りの乳は自分のものにすることができた。プーは5ヶ所

あり、以前は、ひとつのプーで、5、6人で70頭から100頭くらいの家畜を放牧管理していた。

彼は現在、妻（60歳）と二人暮らしである。娘3人、息子2人がいるが、長女は村外に婚出し、次女は上村に嫁いだ。三女は大学生でレーに居住している。息子2人はインド軍兵士になった。

②事例2 女性（50代）チャンチャクス

クラムリックの対岸（右岸）に位置するチャンチャクの最上流（標高およそ4100m）の世帯である。そこは農耕のほぼ上限であるが、主にオオムギとエンドウ、少しのジャガイモ、ナノハナが栽培され、グリーンハウスで数種の野菜が自家用に栽培されている。

家長であった男性が8年ほど前に死亡し、現在は、その妻Pが未婚の次女と孫娘と同居している。5人の娘がいるが、長女、三女、五女は婚出しており、四女は大学生でレーに住んでいる。長女は軍人と結婚してレーに居住し、娘が2人いる。上の娘は学校に行っている。共働きのため、就学前の下の子（Pの孫娘）をPが預かっている。三女と五女はドムカル内で結婚し、それぞれ、2人、1人の息子がいる。

家の前に直径15mほどの家畜囲いがあり、夫が存命中は多くの家畜を飼っていたが、今はほとんど使われていない。以前、所有していた家畜は、ディモ17頭、ヤク6頭、ゾモ5頭、ゾー6頭ほどであった。ヒツジとヤギもあわせて60頭以上飼っていた。夏は夫がプーに行き、妻（本人）と娘たちが、ヒツジとヤギを近くの草地で日帰り放牧をしていた。現在所有している家畜は、ヤク1頭、ゾモ2頭、ゾー1頭、在来ウシ（雄）1頭である。ゾモとヤクは夏放牧地プーのテベスドムに行っている兄に預けている。

③事例3 男性（59歳）クラムリック

クラムリックの農地で主にオオムギとエンドウを栽培し、家畜は、ヤク1頭、ディモ9頭、ゾー1頭を所有し、クラムリック周辺で日帰り放牧をしている。朝、クラムリックから上の草原に追う。夕方になると家の方に帰ってくる。ディモ1頭だけが泌乳中で、毎朝搾乳する。他は乳が出ないので、家に戻さないで上の草原でそのまま放牧させることもある。搾乳しているのが1頭だけなので、

プーに預けることはできない。

家族は、妻と、息子2人、娘1人がいるが、今はクラムリックで夫婦だけで暮らしている。長男はインド軍兵士になり、次男はレーで運転手をしている。長女は村外に婚出している。

テベスドムの牧者のひとりの家族構成は次の通りである。兄弟で妻（下村出身）を共有する一妻多夫婚家族で、子どもは4人いるが、長女は婚出し、長男はレーで運転手の仕事をし、次男は僧侶、次女は学生（10年生）でカルツェに住んでいる。

この事例をふくめた4事例をみても、子どもたちのほとんどが村外に出ていることがわかる。若者が村を出て戻らないため、高齢化が顕著に進行している。山口哲由らが、2009年におけるドムカル3村の住民の年齢構成と在村者の割合を詳しく報告している（山口ほか2013）。それによれば、10代の在村率が41%、20代で38%、30代で57%、40代で79%、50代以上では95%以上と、著しい若年層の村外居住が明らかである。

以上のような過疎化、高齢化のため、家畜の世話をするための人手が著しく不足しているのが現状である。ドムカル全体の家畜個体数も減少しており、プーに預ける搾乳家畜の減少傾向も著しい。したがって、必然的に夏のプーでの放牧管理の必要性も減じている。泌乳のない家畜の共同放牧管理のバレスの慣習はすでに消滅したが、夏にプーを利用する移牧もいずれ消滅する可能性が高いであろう。

テベスドムの牧者3人は、「健康な間はこの仕事をやりたいが、この仕事は自分たちの時代で終わる。子どもたちは、レーの方に仕事に行って、クラムリックには戻らない。子どもたちは、このような重労働の仕事はやめたほうがいい。」「5、6年前までは、4、5ヶ所に放牧のキャンプがあって、全部で15人ぐらいいたので、集まってチャンを飲んで楽しんだ。しかし、今は来なくなって寂しくなっている。自分たちもいつまで続けられるかわからない。」という。

7. おわりに

ラダークの社会と住民に大きな影響を与えた歴史上の重要な出来事は、1834年のドグラ体制への移行、1948年のインド・パキスタンの分離

独立とそれ以降の国境紛争、1971年の農地改革、その後のインド政府による食糧援助などであろう。

国境紛争は、ラダークの人びとの広域の交易を困難にし、一方、国境地域での軍事基地の展開と道路建設を促し、結果として市場経済の浸透、近代化を早めたという側面をもつ。

その影響により、ドムカルにおいても、約20年前に下村に電気が通じ、約15年前には中村まで道路と電気が通じ、現在、道路は上村からクラムリックに向けて建設中である。それによって、ドムカル住民の生活様式は大きく変わった。政府による食糧援助は約30年前から始まったが、道路の建設とともに浸透した。学校が普及し、ほとんどすべての子どもたちが学校に行くようになり、大学に進学する若者も増えてきた。軍事基地の展開は、兵士としての大きな雇用を産み、他の職業の就業機会も増えた。軍事基地の展開が、エンドウやアムズなどの商品作物や、肉用の家畜の需要を産み、現金収入源が増え、政府による食糧援助もあって、生活は楽になった。しかし、就学や就職機会の増加によって、若者の離農・離村が急速に進んでおり、村の高齢化・過疎化が進行した。

ドムカルの事例から、クラムリックとプーでの家畜飼養に焦点を当て、非常に厳しい自然環境に適応した、独自の特徴をもつ生業システムを見てきた。その固有の生業システムは、巧妙な家畜管理・乳加工技術、住居構造などの物質文化とともに、それらを培ってきた社会システムに支えられてきた。ドムカルの人びとの心豊かな暮らしは、信仰と、親族や隣人の間の互酬・相互扶助システムを基盤とする強固なコミュニティの中で営まれてきた。しかしながら、上に概観したように、この30年ほどの間に外部から急激な社会環境の変化がもたらされ、西ヒマラヤの高所に適応したドムカルの生業と社会が、相互に連動して大きく変わりつつあり、住民の生活と心がその変化に晒されてきた。

高所プロジェクトにおいて、医学と食・栄養学の観点から住民の健康への大きな影響が明らかにされてきた（奥宮 2011・2013、奥宮・稲村 2013、木村 2013、福富 2012）。その背景についてのさらなる理解のためには、住民の生活の現状と心の内

を知ることが不可欠である。また、そのためには、本来の生業システムと社会背景、及びその変化への理解が重要である。本稿がその一助となれば幸いである。

注

- 1) ヤクとウシの異種間交雑種の雌ゾモは繁殖能力をもつが、雄ゾーは繁殖能力をもたない。ただし、ゾーも、ゾモが発情するとマウンティングをする。
- 2) 後述の元牧者は、さらにサカルモ (Sakarmo) を加えて5ヶ所のプーを挙げた。
- 3) 乳を出やすくする「催乳」であり、広くチベット・ヒマラヤ、モンゴルにおけるウシ、ヤク、ウマ、ラクダ、トナカイ等の搾乳に共通する。

参考文献

- 池田菜穂 2010「現代のインド、ラダーク地方における牧畜業の経営状況—ラダーク、ドムカル村における事例調査報告」ヒマラヤ学誌 11:91-105
- 稲村哲也 2009「『熱帯高地』の比較研究—ヒマラヤ・チベットとアンデスにおける高度差利用」ヒマラヤ学誌 10:115-134
- 奥宮清人（編）2011『生老病死のエコロジー：チベット・ヒマラヤに生きる』昭和堂
- 奥宮清人 2013「高所と健康—低酸素適応と生活変化の相互作用」西村書店
- 奥宮清人、稲村哲也（編）2013『続・生老病死のエコロジー ヒマラヤ・アンデスに生きる身体・時間・こころ』昭和堂
- 木村友美、他 2011「ラダークにおける基本料理の栄養成分データベースの構築」ヒマラヤ学誌 12:32-39
- 木村友美、他 2013「インド・ラダークにおける住民の栄養摂取量と糖尿病との関連」ヒマラヤ学誌 14:39-45
- 月原敏博 2009「ラダークにおける医学との境界領域研究計画」ヒマラヤ学誌 10:174-182
- 野瀬光弘、竹田晋也 2011「インド北部ラダーク地方の農林地利用状況—2010年ドムカル村医学キャンプでのヒアリングから—」ヒマラヤ学誌 12:85-92

- 平田昌弘 2010「インド北部ラダック高地山岳地帯の移牧民の生業構造～ドムカル村における食料摂取の視座から～」ヒマラヤ学誌 11:61-77
- 平田昌弘 2011「ヒマラヤ・ラダークの移牧の特質—農耕・牧畜・交易複合システム—」ヒマラヤ学誌 12:40-59
- 福富江利子、他、2012「ラダーク3地域の主観的QOLの比較—うつ症状と幸福度に着目して—」ヒマラヤ学誌 13:94-101.
- 山口哲由 2010「ラダーク地域における村落の変容—山地における人と環境の結びつきに関する考察」ヒマラヤ学誌 11:78-90
- 山口哲由、ソナムゴデウツプ、野瀬光弘、竹田晋也 2013「ラダーク山地社会における農林牧複合の農業形態と土地利用の変容」ヒマラヤ学誌 14:102-113
- 山田勇 2013「高所世界の位置づけ—比較生態資源論の立場から」奥宮清人・稲村哲也編『続・生老病死のエコロジー ヒマラヤ・アンデスに生きる身体・時間・こころ』昭和堂、89-105
- 山田孝子 2009『ラダック—西チベットの病いと治療の民族誌』京都大学出版会
- 山本紀夫・稲村哲也（編）2000『ヒマラヤの環境誌—山岳地域の自然とシェルパの世界—』八坂書房

Summary

Characteristics of the Traditional Animal Husbandry, its Social Background and Transformation in Domkhar Valley, Ladakh, India

Inamura, Tetsuya¹⁾, Khanal, Kishor Chandra²⁾, Yamamoto, Norio³⁾,
Karmacharya, Ishwari⁴⁾

- 1) Open University of Japan
- 2) Institute of Multi-disciplinary Studies in Nepal
- 3) National Museum of Ethnology (Honored Professor)
- 4) Painter of Religious Painting and Researcher of Iconography

Domkhar valley is one of the highest agricultural places in Himalayan valleys, with its highest altitude about 4,150m, along with very cold and dry climate condition. Pastoral transhumance of yak, drimo (male yak), dzomo (female hybrid between cow and yak), dzo (male dzomo) and baling (local cattle) is practiced at the same time with agriculture in this area. Herders groups composed of a few men breed the animals on the high grassland so called "Phu" located around 4,550m ASL, and do milking and processing. Moreover, there are some more patterns of traditional animal husbandry, besides this type of pastoral transhumance in Domkhar. The agro-pastoral complex in Domkhar had been adapted to the severe natural environments in this area and developed the unique characteristics. It is also related strongly to the social systems such as reciprocal aid in the community. In this article, authors describe the characteristics of animal husbandry and create an overview of its social background, focusing on Kuramrik, the highest community in Domkhar valley and a Phu "Tepesumdo". Connection of the subsistence and social system, and its transformation are also discussed.